

「いつまでも被災者扱いしないでください」。アンケートに書かれた整った細い文字から、一体どんな人だろうと想像する。仕事があつて車で自由に移動でき、社会的なつながりも多いのだろうか。仮設住宅を出て災害公営住宅に移り、いつまでも「支援される」側にいることを不快に思う気持ちはよく分かる。しかし、私は思う。知っていますか、あなたの隣人が、死にたいほど寂しい気持ちを抱えているかもしれないことを。

私たちの団体は石巻市内の仮設住宅・災害公営住宅向けに無料情報紙を発行している。新聞はポラントニアが直接訪問して配布する。手渡しし、会話することで孤立を防ぐ見守りや心のケアにつながることを考えている。部屋に招かれ「お茶っこ」したり、数時間話し込んだりすることも少なくない。数年前のことだ。新聞を配っている、事務所のスタッフがひどく慌てて連絡してきた。仮設住宅

# 座標



の男性から「死にたくなくて、睡眠薬を大量に飲んだ」と電話があったという。「〇〇団地のアホだと言えは、あきちゃん(私)は分かっから」と言ったそうだ。すぐに思い当たる人の元へ向かった。彼はほとんどした笑顔で私を迎えてくれた。「ごめんねえ…来てくれると思わなかったあ…」。飲んだ薬は致死量ではない。医療関係の知人に相談し、水分を取るよう伝える。その後、「話し相手がほしい」という彼と話をした。震災で30年連れ添った奥さんを亡くした。津波にのまれ、つないでいた手が離れてしまった。数日後、

## 孤独の苦しみ 理解して

彼はがれきの中から救助され、奥さんは遺体で見られる。「地獄を見たんだあ」。言葉とは裏腹に頬は薬で緩んだままだった。

彼はそれからも度々、私に電話をしてきた。「心を入れ替えて頑張るよ!」というときもあれば、自暴自棄なときもあった。そして、忘れもしない、ある年の8月12日午後5時17分。彼からの電話に私は出られなかった。またかかってくると思ったが、電話はなかった。数日後、新聞を見てがくせんとした。彼は私に電話した後、酒に酔った状態で警察署に行き、包丁を取り出して逮捕されていた。誰にもけがをさせていないし、暴れたわけでもないという。留置場に会いに行くと、彼は言った。「寂しくて…。警察署で包丁を出せば相手をしてくれると思った」

身寄りのない人にとつて、年末年始とお盆は普段以上に孤独を感じるのだという。8月12日の電話に出なかったのが悔やまれる。

石巻復興きずな新聞舎代表

岩元 暁子

(東京都練馬区)

## 身寄りのない被災者

住む場所が仮設住宅から災害公営住宅に移っても、状況はあまり変わらない。扉の向こうで、今も「寂しい」なんて言葉では言い表せない苦しみを抱えている人がいることを、私は知っている。苦しみの全ては引き受けられないが、「生きてよかった」と思える日が来ることを信じることはできる。だから、私たちは今日も新聞を配る。「いつまでも被災者扱いしないで」と言えることは素晴らしい。でも、誰もが同じ速さで歩けるわけではない。死にたいほどの寂しさを抱えた隣人がいるかもしれないことを、心に留めてほしい。